検診の必要性

子宮頸がん検診の必要性

子宮頸がんは初期段階では症状がないことが多いため、定期的に検診を受けることが重要です。

子宮頸がん検診で行われているのは「細胞診」という検査です。

細胞診は、子宮頸がんの死亡率を低下させることが科学的に認められ推奨されている検診方法です。（「有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン」推奨グレードA）

細胞診検査について

子宮頸部（子宮の入り口）の細胞を綿棒やブラシなどで擦って採取し、顕微鏡で異常細胞の有無を調べます。通常痛みはありません。

HPV 検査について

細胞診検査と同様に採取した細胞を用いて、子宮頸がんの原因であるヒトパピローマウイルス（HPV）に感染しているかどうかを調べます。

細胞診の代わりに、HPV 検査単独で行う検診も今後普及していくと思われます。（「有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン」推奨グレードA） 諸外国では、子宮頸がん検診は細胞診からHPV単独検査への切り替えが進んでいます。

子宮頸部細胞診と HPV 検査を併用する検診もあります。

当院でもオプションとして HPV 検査を実施しています。また、細胞診の結果が ASC-US となった場合は、4 週間以内であれば検診時に採取した検体で HPV 検査を追加することが可能です。（保険診療対象）

子宮頸がん検診の対象年齢

20 歳以上の症状のない女性が対象となります。

子宮頸がん検診の受診間隔

過去に異常がない人は、2 年に 1 度、定期的に細胞診を受診することが推奨されています。

30 歳から 60 歳の方では、5 年に 1 度 HPV 検査を受ける方法も認められています。

（「有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン」推奨グレードA）

子宮頸がん検診後の精密検査

子宮頸がん検診で「要精密検査」となった場合、必ず婦人科外来を受診し精密検査を受けてください。

精密検査では、コルポスコープ（膣拡大鏡）を使って子宮頸部を詳しく観察し、組織の一部を採取して病理組織診断を行います。

当院の婦人科外来でも行っています。他の病院宛に紹介状を作成することもできます。

子宮頸がん検診についてよくある質問

Q 妊婦中でも検診は受けられますか？

A 検診を受けることは可能ですが、妊婦の初期定期健診で細胞診検査を実施しているまたはするため、積極的にお勧めはしていません。それでも実施する場合は、綿棒などを使用し負荷がかからないように細胞を採取します。

Q 生理中に検診は受けられますか？

A ご本人の希望があれば実施することは可能です。しかし、経血が多いと細胞が採取できない可能性があります。経血が混入すると結果が「判定不可」となることがあり、その場合はもう一度検査を受ける必要があります。

Q 子宮の手術後で検診は受けられますか？

A 子宮を全摘している場合は基本的には子宮がん検診を受ける必要はありません。しかし、子宮頸部を残している場合（子宮体部のみを摘出している場合）には残存する部分から子宮頸がんが発生する可能性もあるため検診を受診する必要があります。受診の必要性についてはかかりつけ医と相談してください。

引用：子宮頸がん　検査：[国立がん研究センター　がん情報サービス　一般の方へ]（ganjoho.jp）

https://ganjoho.jp/public/cancer/cervix_uteri/diagnosis.html